

# NACSIS-CATにおける韓国・朝鮮人著者名典拠の同定

高橋 菜奈子

**抄録：**一橋大学附属図書館で行なったハングル図書の遡及入力を素材として、NACSIS-CATにおける韓国・朝鮮人名の著者名典拠の同定作業について報告する。著者名典拠とのリンク率が低いこと、その原因として同姓同名や同音異名、別名表記によるリンク形成の困難さが指摘できる。リンクを形成するにはその著者の著作、漢字表記、学位・学歴情報が同定根拠として有効であることも明らかになった。各機関が著者名リンクを放棄しないこと、手元の図書から判明する情報を追加していくことの重要性を指摘した。

**キーワード：**著者名典拠、同定、韓国・朝鮮人名、NACSIS-CAT、著者標目、同姓同名、同音異名、別名表記

## はじめに

一橋大学附属図書館では、平成18年度国立情報学研究所（以下、NII）遡及入力事業に採択され、韓国・朝鮮語図書の遡及入力を行った。ハングルで書かれた図書を整理する際に困難な点は、ハンゲルの読解力・文字入力のみが注目されがちであるが、他の言語と同じようにある程度の語学力を備えた図書館員が目録を作成しているという前提に立つならば、技術的な面で最も困難な点は著者名典拠の同定である。

NACSIS-CATにおいては、当初より著者名典拠システムが採用されてきた<sup>1)</sup>が、著者名典拠とのリンク形成については昭和62年11月に強制リンクの機能が解除され、各参加機関の選択に任されることになった<sup>2)</sup>。近年はリンク率が低下していることが問題点として指摘されている<sup>3)</sup>。

平成18年度のNII遡及入力事業においては、①個人名の著者標目について、既存の著者名典拠レコードと同定できる場合は必ずリンク作業を行い、ヒットしない場合は著者名典拠レコードを新規作成のうえ、可能な限りリンク作業を行うが、既存の典拠レコードと同定できない時はリンクを放棄してよい、②団体名の著者標目については、ヒットするもののみリンク作業を行い、ヒットしない場合や既存の典拠レコードと同定できない時はリンクを放棄してよいという方針がNIIから示された。これを受けて本学における遡及入力では、個人名著者名について、可能な限り著者名典拠とのリンクを形成した。

本稿では、まず、遡及入力状況の概要を述べ、次に著者名典拠の問題に絞って考察を行う。そこでは、リンクの形成の状況分析と著者名典拠同定作業の実例紹介を行う。これらから、NACSIS-CATにおける韓国・朝鮮人名に関する著者名典拠の問題点を述べたい。

## 1. 本学における韓国・朝鮮語図書整理の状況

一橋大学附属図書館のハングルで書かれた図書は昭和41年の統計書の収集から始まり、その後、朝鮮近・現代史に関する資料を中心に、政治、経済、法律、社会、言語、日韓関係等の分野にわたっている。言語別統計がないので、所蔵冊数は正確な数字ではないが、平成17年度末で約11,000冊である。

NACSIS-CATでは、平成12年1月にデータベースがUCS化され<sup>4)</sup>、次いで、平成14年に「韓国・朝鮮語資料の取扱い」<sup>5)</sup>および「韓国・朝鮮語資料の取扱い」解説<sup>6)</sup>が公表された。これにより、韓国・朝鮮語図書の書誌を転記の原則に従ってハングルで登録する環境が整っている。本学でも現在は通常の和書・洋書と全く同様の整理を行なっているが、ここに到るまでの整理方法は、種々の変遷があった(表1)。当初はカード目録を作成していたが、平成3年度からデータベースへの登録へと移行しはじめ、NACSIS-CATに書誌が登録されているもの、漢字で登録できるものと順次登録対象を拡大してきた。平成14年度にNACSIS-CATではハングルでの登録が可能となったが、本学のローカルシステムが多言語化を果たしたのは平成17年1月のことである。この間は、WebUIPを利用して、ハングルでNACSIS-CATに登録を行い、ローカルのデータベースには文字コードを菱形で囲った◆U0000◆という表示のまま書誌をダウンロードしていた<sup>7)</sup>。ローカルシステムが多言語対応した際に、旧システムで◆U0000◆や◆D0000◆と登録されていた文字は、文字コードを変換した。また、旧システムから移行した書誌すべてについてNIIから書誌上書きダウンロードを行ったので、漢字で登録された暫定書誌についてもNACSIS-CAT側で修正されていれば変換がなされている。現在は図書館システムのブラウザがインターネットエクスプローラ（以下、IE）なので、IEの文字入力システムを使用して目録を作成してい

表1 一橋大学における韓国・朝鮮語図書整理方法の変遷

	カード目録	ローカルデータベース	NACSIS-CAT
～平成2年度	すべて	なし	
平成3～10年度	登録時点でNCに書誌がないもの	登録時点でNCに書誌があるもの	
平成11～12年度	漢字表記に翻訳できないもの	漢字表記に翻訳できるもの	
平成13年度	なし	すべて翻訳して入力	
平成14～16年度	なし	◆のまま登録	UCSで入力
平成16年度(平成17年1月)～	なし	UCSで入力	

る。業務用端末用にKoreanWriterを各5ライセンス購入しているが、Global IME等を設定しても入力可能である<sup>8)</sup>。

平成18年度当初には3,000冊がローカルデータベースに登録されていたのみであったが、年度末には7,500冊を上回る登録件数となっている。

## 2. 韓国・朝鮮人名の著者名典拠の必要性について

NACSIS-CATでは著者名典拠とのリンク形成は必須ではなく、各参加機関の選択に任せられている。では、なぜ韓国・朝鮮人名の著者名典拠と可能な限りリンクする方針をとるべきなのだろうか。

韓国・朝鮮人名は、日本人名・中国人名などと同じく漢字表記ができる。しかし、日本人名や中国人名と異なるのは、漢字のヨミはハングルでも表記でき、一般生活においてはハングルのみで表記がなされる点である。図書の情報源上に現れる著者名表示についてみると、韓国で出版された出版物においては、ハングル、漢字、ローマ字という多様性が見られ、同じ図書の中でも情報源によっても異なる表記がなされることが多い。筆者が平成14年におこなった調査<sup>9)</sup>では、図書そのものには漢字表記が表示されていない場合が36.6%みられるという結果を得ている<sup>10)</sup>。1つの漢字に対しては概ね1つのハングルが対応するが、1つのハングルに対しては複数の漢字が対応する。したがって、約3割の出版物について、何らかのレファレンスツールを使うなどしない限り漢字表記は判明しないということになる。

「韓国・朝鮮語資料の取扱い」<sup>11)</sup>の中では、「著者名標目に関しては、原則として、最初に典拠レコードを作成する際に用いた資料に表示されている字体のまま記録する。ただし、著名な著者等については、最も良く知られた字体で記録する。著名な著者に関しては、著者名の表現が、漢字、ハングル、カタカナ、ラテン文字等の字体である可能性があるが、そのなかで最も良く知られた字体を採用する。韓国・朝鮮語の個人名について、日本人と同様、姓、名を

カンマで区切る。ハングルで標記された団体著者名には、ハングルヨミを付与する。カタカナ表記の標目は、日本名と同じ扱いとし、ハングルヨミは付けない。」と規定された。この規定によって、個人名の標目形は「漢字||ハングルヨミ分かち書き」または「ハングルヨミ」となった。最初に作成された書誌記述に標目の形が既定されるので、図書そのものからは漢字が不明な場合が3割程度あることを考えると、漢字のない「ハングルヨミ」のみの標目も3割程度は出現する可能性がある。さらには、最初に書誌が作成されるのも韓国・朝鮮の出版物だけとは限らない。著名な著者は例外として日本語ヨミやローマ字表記も認められたので、ローマ字・カナのうち、いずれの表記で入力されるかは、最初の資料にどのように記載されているかに左右される。NACSIS-CATでは韓国・朝鮮人名の標目の形は、事実上、統一されていないのである。これらの諸規則の結果として、NACSIS-CATには現実に多種多様な記述と標目が出現している<sup>12)</sup>。

漢字・ハングル・ローマ字・カナという少なくとも4通りの表記のうち、標目として採用できるのはNACSIS-CATの現行の規則では、2種類までである<sup>13)</sup>。著者名典拠を維持していくことは、こうした表記の違いによる検索漏れを防ぐために重要なのである<sup>14)</sup>。

## 3. 韓国・朝鮮語資料の著者名リンク形成状況

以下では、著者名典拠に対する作成・修正・リンク形成処理の結果について述べる。平成18年度にNII遡及入力事業で2,000冊、それ以外に職員が平行して入力を進め、合計4,498冊の遡及入力を行った。調査の対象とするのは、これらのうち、初期の準備段階で入力したものを除き、個人名の出現した書誌906件である。

先に述べたとおり、個人名に関しては可能な限り著者名典拠へのリンクを行なうことを基本方針とした。まず、最低限ハングルと漢字形からの著者名典

拠検索が可能となるように作成、修正を行った。統一標目形フィールド（以下、HDNG）に漢字形が存在すればよいが、HDNGに漢字形がない場合は、から見よ参照形フィールド（以下、SF）に漢字形が存在するかどうかを確認することとした。つまり、漢字形がHDNGにないが、手元の図書から判明した場合は必ずSFを追加、英文表記・カナ表記も判明すれば入力する方針とした<sup>15)</sup>。また、生没年を記入する時間フィールド（以下、DATE）、出身地を

記入する場所フィールド（以下、PLACE）などでもできる限り記入したのに加え、取得学位・出身校が判明するときは注記（以下、NOTE）に入力することにした。

表2は、調査対象とする書誌906件に対して、著者名典拠を新規作成・修正・リンクした件数を書誌の状態別に集計したものである。総計としては、1,392件の個人名著者名標目が処理の対象となった。

第一に言えるのは既存書誌のリンク率の低さである。表3には、既存書誌（表2の②③④）に着目してリンク形成されていたか否かをまとめた。リンク済みの標目291件に対して未リンクの標目が425件であり、リンク率は40.6%に過ぎなかった。兎内による平成14年の言語別のサンプル調査では、著者名典拠のリンク率は日本語資料65.4%、英語資料57.2%、中国語資料42.1%であったという<sup>16)</sup>。日本語資料・英語資料と比較すると、韓国・朝鮮語資料は格段に低いリンク率である。

リンクが放棄される要因として著者名典拠の新規作成が避けられていることが推測できる。そこで、表4では、未リンクであった書誌（表2の①②）のみに着目し、リンク形成作業の結果を示した。既存の未リンク書誌425件に対してリンク形成の作業を行った結果、著者名典拠を新規作成したのが260件と61.2%を占めている。既存書誌でリンク率が低いのは、著者名典拠の新規作成に対する負担感からリンク放棄につながったことを予測させる。新規作成した書誌におけるリンク形成作業についても676件のリンクを形成したが43.9%は著者名典拠の新規作成を行わなければならなかった。

兎内は「典拠レコードが十分に作成されずリンク形成率が低下するということは、ある参加館がリンクを形成するポリシーを採用した場合の負担が増大するということを意味し、リンク形成から手を引く館が増えることによってますますリンク形成率が低下するという、負の循環が将来進行する可能性が大きい。」<sup>17)</sup>と指摘している。リンク率を向上させるにはある一定程度の数まで典拠の蓄積が必要である。日本語資料・英語資料の場合、NACSIS-CAT創設時には著者名リンクが必須であったために一定程度までの典拠蓄積が半ば義務化された形で進行した。しかし、中国語資料や韓国・朝鮮語資料はリンク形成が必須ではなくなった後に登録が解禁されたために、初めからリンク率が伸びない「負の循環」に陥っているとも解釈できる。韓国・朝鮮人名の著者名典拠の基盤は全く未整備であるといってよい。

表2 個人著者名標目の処理件数

書誌	著者名典拠			
	a.新規作成	b.修正	c.リンクのみ	d.リンク放棄
①新規作成	297件	108件	267件	4件
②既存書誌あり (著者名リンクなし)	260件	46件 b.修正	109件	10件
③既存書誌あり (著者名リンク済) HDNG：ハンゲル	(漢字追加) 27件		確認のみ 30件	
④既存書誌あり (著者名リンク済) HDNG：漢字    ハンゲル			確認のみ 234件	

表3 既存書誌の著者名リンク率

	件数	リンク率
リンクあり	291	40.6%
リンクなし	425	59.4%
計	716	100%

表4 未リンク書誌へのリンク結果

対象書誌	作業内容	件数	対象書誌ごとの割合
新規作成書誌	典拠新規作成	297	43.9%
	リンク形成 (含典拠修正)	375	55.5%
	リンク放棄	4	0.6%
	計	676	100%
既存未リンク書誌	典拠新規作成	260	61.2%
	リンク形成 (含典拠修正)	155	36.4%
	リンク放棄	10	2.4%
	計	425	100%

表5 同定箇所の数

同定箇所	件数	割合	内訳						
			漢字表記	生没年	出生地	学位・学歴	職業	著作	主題
1箇所	60	12.1%	0	0	0	8	9	32	11
2箇所	191	38.5%	113	18	12	59	37	103	40
3箇所	142	28.6%	111	38	32	83	37	117	8
4箇所	71	14.3%	61	44	60	42	20	56	1
5箇所	31	6.3%	31	29	31	30	3	31	0
6箇所	1	0.2%	1	1	1	1	1	1	0
7箇所	0	0%	0	0	0	0	0	0	0
計	496	100%							

#### 4. 既存の著者名典拠レコードとの同定

リンク放棄の要因として、韓国・朝鮮人名の同定の困難さも考えられる。そこで、本節では、表2中の①b, ①c, ②b, ②cについてより詳細な分析を行なう。これらは著者名リンクされていなかった書誌（新規作成書誌および既存書誌とも）に対して、既存の著者名典拠レコードとの同定が可能で、新たにリンクを形成したものである。とくに、処理内容の重複を除いた496件について、著者名を同定する際にどのような情報を以って同定したかに着目して分析をすすめる。

既存の著者名典拠レコードと一致するか否かを確認するポイントとして、漢字表記、生没年、出生地、学位・学歴<sup>18)</sup>、職業、著作、主題という7つのカテゴリーを設定した。このうち、著作については著者名典拠のNOTEに記述された著作に加えて、当該の著者名典拠にリンクされている別の書誌を確認することで行なった。また、主題というカテゴリーは、確認程度に用いる場合と有名人等で同一人物であることが明らかな場合にカウントするのに留め、多用するのを避けた。

同定箇所の個数を示したのが表5である。これによると2箇所同定したものが191件で最も多く、次に3箇所同定したものが142件である。2箇所もしくは3箇所同定した件数が全体の67.1%を占めている。同定箇所が多いほうが確実だといえるが、既存レコードの情報量と手元の図書の情報量に左右されるので、4箇所以上は20.8%に留まった。一方、1箇所のみで同定したのも60件（12.1%）あった。ただし、漢字表記の一致だけで同定をすると、別人をリンクしてしまう危険性をはらんでいるので、漢字の一致のみでの同定は行なわなかった。

カテゴリー別の一致箇所全体の合計は表6の通りである。多かったのは著作による同定で340件

表6 カテゴリー別一致箇所

カテゴリー	一致件数	全体に占める割合
漢字表記	317	63.9%
生没年	130	26.2%
出生地	136	27.4%
学位・学歴	223	45.0%
職業	107	21.6%
著作	340	68.5%
主題	60	12.1%

(68.5%)、漢字表記による同定317件（63.9%）である。ついで、学位・学歴による同定223件（45.0%）、以下、出生地136件（27.4%）、生没年130件（26.2%）、職業107件（21.6%）と続いている。

出版物の著者略歴にどのような項目が記載されているか、既存の著者名典拠レコードに図書に記載された情報が記入されているか否かによって、同定できるかどうかは左右される。先に紹介した平成14年の調査では図書そのものから漢字が判明するのは63.4%という結果であったが、同じ調査において日韓の出版物の著者略歴にどのような項目が記載されているかも調べている。その結果、韓国の出版物には現在の職業（96.2%）、主要著作（86.8%）、出身校（85.8%）、学位取得に関する情報（69.8%）は比較的よく記載されていること、その一方で生没年は30.2%、出生地は40.6%に止まっていることを明らかにした。平成14年の調査では、実際にNACSIS-CATの著者名典拠において標目以外にどのようなデータが記述されているのかも調べている。DATEおよびPLACEはそれぞれ、38.5%と50.0%の著者名典拠に記載が見られるのに対して、NOTEの情報は学位（25.0%）、現職（29.2%）、出身校（30.2%）

ともに3割前後にとどまっていた。

以上を踏まえると、今回の同定箇所を集計結果からは次の3点が指摘できる。

第一に、別人を区別するために最も有効だったのは著作での同定(340件68.5%)である。書誌上に記述された著作に加えて、リンクされている著作も同定の決め手となりうる。著者名典拠にリンクされる書誌が増加すればそれだけ同定の可能性も高まるのが予想されるので、各機関がリンクを放棄しないことが大切である。

第二に、漢字表記による同定が317件(63.9%)であったのは、図書そのものに漢字が表記されている割合を勘案するとほぼ妥当な数字である。

第三に、NOTEフィールドの記述も有効な同定のポイントであった。今回の同定作業では、漢字表記、著作情報について学位・学歴情報が同定箇所となっている。しかし7割近くの図書に記載されている割には同定箇所となったのが45.0%に止まったのは、NACSIS-CATの著者名典拠レコードにこれらの情報が記述されていなかったことが一因と推測できる。今後、韓国・朝鮮人の著者名を同定するためにも、NOTEフィールドへの記述を拡充していくことが望まれる。

## 5. 著者名典拠同定の実際

本節以下では具体的な事例を紹介しながら、著者名典拠同定の困難さを見ていきたい。

最初に同定のための情報量が極端に少ない場合の事例を紹介する。著者名典拠レコードそのものに情報がほとんどない場合や手元の図書にほとんど著者に関する情報がない場合は、著者名リンクを形成するのは容易ではない。レファレンスツールを使って調べても既存のレコードと同一人物であるか否かを確定できず、リンク形成を断念せざるをえなかったものが、調査対象とした1,392件の個人名著者名標目に対して、14件あった。

たとえば、『현대북한외교론』<sup>19)</sup>の著者김용호(金用浩)の場合、著者名典拠を検索すると、下記のようなレコードがヒットした。

<DA14669691>

HDNG : 김, 용호

TYPE : p

NOTE : SRC : 마음 길들이기 / 아잔차 지음 ; 김용호 옮김(도서출판 고요한 소리, 1987.5)

手元にある図書の著者略歴には学位・学歴情報・職歴が記載されていたが、同一人物とも別人とも確定できなかったため、リンク形成することも、新規作成することもできず、リンクを放棄することにな

った。

一方、『國際法新講』<sup>20)</sup>の著者、李丙朝の場合は、手元の図書にもほとんど情報がなく、ヒットしたレコードも下記のとおりであった。

<DA14674057>

HDNG : 李, 丙朝 || 이, 병조

TYPE : p

NOTE : SRC : 美國法入門 / H.J. 버어맨 著, 李丙朝 譯(探求堂, 1968)

このままでは、分野は類似しているが漢字が一致しているのみなので確定できない。だが、この著者の場合、『韓國學研究人名録』<sup>21)</sup>に記載があり、「國際法新講」も「美國法入門」も掲載されていたので、リンクを形成することができた。

このように同定に到るには調査を要する場合もある。作成館が手元の図書で判明する情報を記述しておくこと、別の図書で重要な情報が判明した場合は内容を充実していくこと、最低限、同定できた場合はリンクを形成することをより多くの館が実行していけば、後続の館がより確実な同定ができることになるだろう。

## 6. 同姓同名・同音異名

韓国・朝鮮人名は同姓同名が多い。加えて、ハングル表記のみの場合、同音の漢字が存在する姓は57あり、特に、漢字表記がある場合に比して、ハングルのみしか判明しない場合には、同音異名の判別を行う必要もある<sup>22)</sup>。同姓同名と同音異名の多さは著者名を同定する上でもっとも困難な問題といえるであろう。事例を挙げながら実情を見ておきたい。

『悲劇의軍人들』<sup>23)</sup>の著者、李基東の場合、漢字で検索すると<DA03134273>李, 基東(1951-)と<DA11572946>李, 基東(1943-)の2件がヒットした。さらにハングルで検索すると<DA03127314>Lee, Kee-dong, 1940-と<DA12366768>李, 氣銅も存在した。『悲劇의軍人들』にはほとんど著者に関する情報は存在しないので、このままでは漢字表記の異なるものを除いた3つの典拠のいずれかということは確定できない。そこで、今度は逆に各典拠にリンクされている図書を調査した。その結果、<DA11572946>の作成の根拠となった図書<sup>24)</sup>を本学でも所蔵していたので参照してみると、その著者略歴に記載された著作名が『悲劇의軍人들』の序文にも記載されていたので、<DA11572946>李, 基東(1943-)と一致することが判明した。

同姓同名の別人を同一著者名典拠に混在してしまっているケースも存在した。『朝鮮後期經學思想研究』<sup>25)</sup>の著者、金文植は当初は<DA1422358X>金,

文植 (1920-) とリンクを形成していた。しかし、今次整理した『農業経済学』<sup>26)</sup>の著者、金文植の学位・学歴情報と一致しないことに気がついた。同姓同名の金文植が存在することが判明したので、別の典拠<DA15472808>を作成してリンクをつけかえることになった事例である。漢字表記への依存は禁物である。同姓同名の可能性を考慮して、今回の同定作業では漢字の一致のみでの同定は行なわなかったことは先に述べたとおりである。

次は同音異名の事例である。『현상학과 시간』<sup>27)</sup>の著者김영민は、図書そのものには漢字表記はなかった。著者名典拠をハングルで検索すると<DA13634487> 김,영민 (1955-) と<DA14976260> 金,榮珉の2件がヒットし、前者のSFには金,榮敏という漢字形と学歴、職歴が記されていた。『현상학과 시간』の著者略歴には学歴、職歴、主要著作が記されていたので、前者は別人であることが判明したが、後者はレコード自体に学歴、職歴の記載が無いために一致しているかどうか判明しない。そこで、著者が現在所属している大学のホームページを探索した結果、金永敏という漢字形に辿り着き、既存の同音の2つのレコードともに別人であることが判明した。結果、新規作成をすることができたのである。

このように同姓同名や同音異名が多い韓国・朝鮮人名においては、細心の注意をもってリンクを形成しなければならず、そのために調査を要する場合もある。調査においては人名辞典等のレファレンスブックに加えて、Webでの探索も有益な情報源となる。

## 7. 別名表記

NACSIS-CATでは、からも見よ参照を除けば、同一著者に対しては1レコードを作成することになっているにもかかわらず、同一人物が別のレコードになってしまっているケースもあった。

『한·일 문학의 관계론적 연구』<sup>28)</sup>の著者、沈元燮の場合、<DA13730378> 심, 원섭 と<DA15071884> 沈, 元燮 || シム, ウォンソプの2件がヒットした。これらは同定の結果、重複レコードであることが判明した。先に作成されたレコードをみると、

<DA13730378>

HDNG : 심, 원섭

TYPE : p

SF : シム, ウォンソプ

NOTE : SRC : 사례구사 교수의 한국문학 연구 / 사례구사 도시카쓰 著, 심원섭 옮김 (베틀북, 2000.5)

と記述されている。ハングルとカナ表記のみだったので、漢字表記で別の典拠が作成されてしまったと推測できる。

『百濟와 大和 日本의 起源』<sup>29)</sup>の著者、洪元卓の場合、<DA01581135> Hong, Wontack と<DA14389979> 洪, 元卓の2つのレコードが存在した。<DA01581135> Hong, Wontack には漢字表記もハングルも存在しなかったが、流用元と見られるUSMARCには Paekche wa Taehwa Ilbon ūi kiwŏn, 1994: t.p. (Hong Wŏn-t'ak) colophon (Wontack Hong [in rom.]) という手元の図書と一致する記述があったので、同一人物と判断してリンクを形成した。ローマ字表記を見逃したために、漢字表記の重複レコードが発生した事例である。

このように、韓国・朝鮮人名を扱うときは、標目には漢字やハングルだけでなくカタカナ表記やローマ字表記もあることを念頭に置かなければならない。表記の違いによる検索漏れを常に注意しておく必要があるだろう。

## おわりに

本稿では、韓国・朝鮮人名の著者名典拠の同定作業について、リンク率・同定箇所・同姓同名や別名表記による困難性という側面から報告を行なった。最後に課題の指摘と若干の展望を述べて結びとした。

まず、本稿の分析の結果から、NACSIS-CATにおいて、著者名典拠の維持をしていく体制づくりの必要性を指摘しておきたい。リンク率の低下とその背景にある同定の困難を乗り越えてまで参加館が著者名典拠維持を行うインセンティブをどのように確保すべきなのであろうか。本学の作業の中では、典拠を作成しておいた結果、後でその典拠にリンクしたケースもあった。典拠を新規作成しておくことは次からのリンク形成の負担を軽減することにつながり、リンクされている書誌が多いと著者の同定が容易になるため、さらにリンク率が上昇する。早くこのような「正の循環」に至るようである一定程度の数まで典拠の基盤整備を行なう必要があるだろう。MARCの導入も望まれるところである。よく管理された高い品質の著者名典拠は、より検索しやすいデータベースの構築に資することができる。現在のNACSIS Webcatは著者名典拠を活用した検索システムとはなっていないが、著者名典拠を確実に維持しておくことは将来的な検索サービスの高度化への基礎固めとなることを再確認しておきたい。

さて、本稿で扱った問題は外国人名を扱うときにどのように著者名典拠ファイルを維持していくこと

が適当かという普遍的な問題を含んでいる。日本における韓国・朝鮮人名は漢字・ハングル・ローマ字・カナという少なくとも4通りの表記が考えられるが、何を標目として採用すべきかという文字の問題といってもよい。今までの標目はあるデータベースが想定している利用者の主言語によって決定するのが主流であった。『日本目録規則』<sup>30)</sup>では標目はカナで記入することになっており、JPMARCでもカナで記入されている。海外の例を挙げれば、USMARCではアルファベットで標目を記述しているし、KORMARCでは外国人名もハングルで標目を記入している。しかし外国人名を別の文字で記述をするには翻字方法の確立という課題を抱え込むことになる。韓国・朝鮮人名の現地音によるヨミをカナで表記するための表記法は必ずしも定まっておらず<sup>31)</sup>、標目に揺れが生じる可能性が大きい。ハングルからローマ字への翻字もALA-LC方式<sup>32)</sup>、1959年に発表された韓国文教部方式（現在は韓国文化観光部による2000年改定版<sup>33)</sup>）など複数の方法がある。翻字表が改定される事例が示しているとおおり、外国語である以上完璧なる翻字方法というもの存在しえない。

NACSIS-CATの標目の特徴は、韓国・朝鮮人名の場合は漢字とハングルを採用することにしたところと評価してよいであろう。日本人名は漢字とカナ、西洋人名はアルファベット、中国人名は漢字とカナとアルファベット<sup>34)</sup>というように、標目に使用する文字を1種類に限定していないのである。翻字法が原因となる標目の揺れを防ぐため、利用者の主言語によって決めるのではなく、その著者の著作の主言語によって決めようという独自の規則を提案したものと解釈することができる。将来的な著者名典拠の国際交換を視野にいれたとき、多様な文字で表現される人名をどのように扱うべきかという議論<sup>35)</sup>の中で、日本における韓国・朝鮮人名の取り扱いが格好の検討の素材となるであろう。本学での著者名典拠作業への取り組みは小さな試みではあったが、より良い目録データベース作成のための基礎的なデータとなれば幸いである。

#### 謝辞：

平成18年度の遡及入力事業にかかわった関係者の方々に感謝申し上げます。特に本学附属図書館の小澤智子氏には本稿の基礎データ作成も含めてご協力をいただきました。記して謝意を表します。

#### 注

- 1) NACSIS-CATについては、①宮澤彰. 学術情報セン

ターの著名典拠について、学術情報システムにおける総合目録の機能と運用に関する研究. 1988.3, ②横山幸雄. 共同・分担目録における典拠コントロール-NACSIS-CATの著者名典拠システム. 情報の科学と技術. Vol.41, No.2, 1991.2, p.113-122等, 多数の研究・紹介がある。

- 2) オンライン・システム・ニュースレター. No.9, 1987.10.14, “典拠リンクの任意化（強制解除）について”（オンライン）, 入手先<<http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/PUB/nl/nl-09-02.html>>, (参照日付2007-06-18)
- 3) 兎内勇津流. NII総合目録データベースにおける著者名典拠ファイルの形成過程. 大学図書館研究. No.73, 2005.3, p.1-13.
- 4) UCS (Universal multi-octet coded Character Set 国際文字集合)とはISO/IEC 10646-1:1993 (JIS X0221-1995)及びAmendment 1-9 (UNICODE2.0相当)に規定されている文字コードのことである。UCSには世界の主な言語で使われる文字のほとんどが収録されている。(オンライン・システム・ニュースレター. No.69, 1999.12.20. “多言語対応目録システム運用開始に伴うシステム変更点”（オンライン）, 入手先<<http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/PUB/nl/nl-69-03.html>>, (参照日付2007-06-18))
- 5) “韓国・朝鮮語資料の取扱い”（オンライン）, 入手先<[http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/manuals/korea\\_toriatsukai.pdf](http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/manuals/korea_toriatsukai.pdf)>, (参照日付2007-03-24)
- 6) “「韓国・朝鮮語資料の取扱い」解説”（オンライン）, 入手先<[http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/manuals/korea\\_kaisetsu.pdf](http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/manuals/korea_kaisetsu.pdf)>, (参照日付2007-03-24)
- 7) 利用者にはWebcatを見るように指導していた。
- 8) なお、本学の分類方式は2種類ある。本館分類と呼ばれる平成7年度まで使用していた分類表とコード分類と呼ばれる平成8年度以降現在まで使用している分類表によって請求記号が付与されている。いずれも開架図書であるが、本館分類は分類体系そのものが言語別になっているため朝鮮語図書が固まって配架されているのに対してコード分類は日本語図書・中国語図書と混配である。
- 9) 高橋菜奈子. NACSIS-CATにおける韓国・朝鮮人著者名典拠の標目記述とその課題-韓・日出版物にみる著者名表記の字体と著者略歴の分析を通して. 日本図書館情報学会誌. Vol.51, No.1, 2005.3, p.15-24.
- 10) 今回の対象資料でも約3割については漢字表記が判明しなかった。
- 11) 前掲注5

- 12) 前掲注9高橋論文
- 13) 中国人名の場合のみ3種類まで可能である。筆者は旧稿でこのことを引き合いに出して、韓国・朝鮮人名において、標目の形を「漢字 || 日本語ヨミ || ハングル」としてはどうかと提案した。
- 14) ただし、現在のNACSIS-CATでは、書誌を検索する際には、著者名典拠に納められたその他の表示形からの検索はできない。検索漏れを防ぐためには、書誌検索においても著者名典拠を常に参照するようなシステムを追加することが必要となるであろう。本学の図書館システムでは、書誌をダウンロードした時点でSFからも著者名の検索語をキーワードとして抽出するシステムになっている。
- 15) 実際にはカナ標記が見られる図書はなかった。
- 16) 前掲注3兎内論文
- 17) 前掲注3兎内論文
- 18) NACSIS-CATのマニュアルでは、同定識別に用いられる各種情報として (a) 授与された学位 (博士号) の種類, 専攻 (b) 現在の職業, 勤務先, 肩書 (c) 所属する学協会や同人会の名称を上げており, さらに, 同定識別には直接重要な情報を提供する訳ではないが, NOTEに記録される可能性のある情報として (b) 最終学歴, 最終出身学校名 (但し, 大学以上とする) が示されている。 (“目録システムコーディングマニュアル” (オンライン), 入手先 <<http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/MAN2/CM/mokuji.html>>, (参照日付2007-03-24) )
- 19) 金用浩著. 현대북한의교론. 서울, 오름, 1996, 446p, (정치학총서, 4).
- 20) 李丙朝, 李仲範共著. 國際法新講. 增補新稿版. 서울, 一潮閣, 1990, 833p.
- 21) 國際協力室編輯. 韓國學研究人名録. 增補版. 城南, 韓國精神文化研究院, 1983, 920p.
- 22) 정옥경. 인명표목통제를 위한 전거레코드작성기준에 대한 연구 [A Study on the Guideline of Authority Record for Heading Control of Personal Name]. 한국도서관 정보학회지 .Vol.32, No.4, 2001. 12, p.257-282. この論文でチョン・オッキョン氏は, 同音異名の区別のために, 標目としてハングルを採り, 付記事項に漢字, 主題, 生没年を付加するという提案をしている。
- 23) 李基東著. 悲劇의軍人들: 日本陸士出身의歷史. 서울, 一潮閣, 1982, 295p.
- 24) 李基東著. 新羅社會史研究. 서울, 一潮閣, 1997, 318p.
- 25) 金文植著. 朝鮮後期經學思想研究: 正祖와 京畿學人을 중심으로. 서울, 一潮閣, 1996, 263p.
- 26) 金文植著. 農業經濟學. 3版. 서울, 서울大學校出版部, 1988, 294p
- 27) 김영민 저. 현상학과 시간. 서울, 까치1994, 174p.
- 28) 沈元燮 著. 한·일 문학의 관계론적 연구. 서울 국학자료원, 1998, 414p.
- 29) 洪元卓著. 百濟와大和日本の 起源: 古代韓日關係史. 서울, 다라 인터내셔널, 1994, 505p.
- 30) 日本図書館協会目録委員会編. 日本目録規則. 1987年版, 改訂3版. 東京, 日本図書館協会, 2006, p.315.
- 31) 田辺広. 日韓図書の日録と排列に関する諸問題. 富士大学紀要. Vol.21, No.2, 1989.3, p.51-68
- 32) ALA-LC Romanization Tables “Korean” (オンライン), 入手先 <<http://www.loc.gov/catdir/cpsoc/romanization/korean.pdf>>, (参照日付2007-03-25)
- 33) 文化観光部告示第2000-8号 (2000年7月7日) “국어의 로마자 표기법” (オンライン), 入手先 <<http://www.mct.go.kr/servlets/file/DownloadServlet?id=401&folder=notify&name=로마자표기법.hwp>>, (参照日付2007-03-25)
- 34) 本稿の論点で筆者の提案の再解釈を行うと, 東洋人名の場合, 3種類までの文字種が採用可能ならば, 「漢字 || 利用者の主言語によるヨミ || 著者の主言語によるヨミ」と考えるべきということを主張したものである。
- 35) Tillett, Barbara. B. A virtual international authority file [バーチャル国際典拠ファイル]. Record of Workshop on Authority Control among Chinese, Korean and Japanese Languages (CJK Authority 3) [日本語, 中国語, 韓国語の名前典拠ワークショップ記録第3回] 米澤誠編., 国立情報学研究所, 2002, p.117-153

---

<2007.3.30 受理 たかはし ななこ 一橋大学附属図書館学術情報課図書情報担当>



**TAKAHASHI, Nanako**

**Identification of Korean Author name authority records in NACSIS-CAT**

**Abstract:** The purpose of this paper is to analyze the identification work done on Korean author names in author authority records of the NACSIS-CAT. The samples were found in the retrospective cataloging records of Korean books held by the Hitotsubashi University Library. As a result of our analysis, there is a low rate of links to author authority records. It was pointed that identifying Korean author names is difficult because of situations such as different persons with the same name, different names with the same pronunciation, and variant names with different scripts. In order to create links it is clearly helpful to have information about the author's other works, notation of Chinese character transliteration, academic degrees and alma mater. For each institution to continue creating links to name authority records, it is essential to add distinguishing information from the book in hand when each cataloger registers bibliographic data

**Keywords:** name authority records, identification, Korean author names, NACSIS-CAT, personal author heading, same name, different names, variant names,